



Title	地域と融合した住民参画型 「大学開放」 の実践と可能性 : 地方国立大学博物館の実践例から
Author(s)	藤田, 久仁子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 116, 129-140
Issue Date	2012-08-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.116.129
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49950
Type	departmental bulletin paper
File Information	Fujita.pdf



地域と融合した住民参画型「大学開放」の実践と可能性

—— 地方国立大学博物館の実践例から ——

藤 田 公仁子 *

Practice and Possibility of Open University Taken Part in by Regional Habitants

Kuniko FUJITA

【要旨】 岩手大学では、「大学開放」事業の一環として、「岩手大学ミュージアム」を開設し、研究・教育の成果を広く一般に公開している。また、展示解説を行う「ミュージアムボランティア」を配置している。このボランティアの養成にあたって、博物館の果たすべき役割や、展示している個々の資料に関する情報・資料的価値等について研修をおこなっている。

実際に活動するなかでボランティアから、大学構内にある宮沢賢治や石川啄木ゆかりの建造物などをめぐる「賢治ツアー」等のイベントを企画したいという発案や、展示に関する研究内容をより詳しく学びたい、学生や留学生と交流したい、等々の提案がなされ、それらを積極的に受け入れ、「大学開放」に住民参画する形でミュージアムの運営を行うことで大学を生涯学習の場としている。

【キーワード】 大学博物館 大学開放 生涯学習 ミュージアムボランティア 展示解説

Abstract

Iwate University has used Iwate University Museum not only for exhibitions and educational activities, but also as part of “open university” business, making the materials accumulated through its research activities open to the public.

There are museum volunteer guides who have completed a certain curriculum. They learned about value of each material and social function of museum through the training.

Major reason for becoming the museum volunteer guide is the desire to use their knowledge to educate people visit there to attain a feeling of self-fulfillment, a sense of pride in the area in which they live, and taking pleasure in meeting new people from different places. They are highly motivated to learn more about materials in the museum in detail and how to research and survey. And they proposed a new event called “Kenji Tour” which is a tour of historical sights in the campus.

Taking their opinions and ideas, Iwate University manages its museum in the community. We can see that they are practicing lifelong learning exactly.

* 富山大学地域連携推進機構生涯学習部門 教授

I はじめに

日本の博物館の設置主体は、地方自治体が過半数を占めている、という特徴がある。1990年代以降、「公設民営」ということで設置主体と管理運営主体が分離させられる傾向も強まっているが、設置主体ということでは地方自治体を中心である。とはいえ、国公私立の「大学博物館」も次第に増加してきており、大学が行っている研究活動の過程で収集・集積された資料を展示したり、さらに博物館実習の場として学生の教育に活用されている場合も多い。

ところで、「大学開放」ということが社会的に強く要請されるようになり、様々な公開講座が「学習機会」として市民に提供されるようになり、正規の授業が一般市民も受講することが可能となっている例も多い。私立大学等では、多くの「生涯学習プログラム」を用意し、「資格取得」の要望に応え、「キャリア教育」の領域で多くの講座を開設している例も決して少なくはない。

こうした中で、岩手大学では、地方の国立大学として、多様な「大学開放」の事業を展開してきた。「大学ミュージアム」を開設し、展示解説を行うシステムを導入しその運営に当たって積極的に市民のボランティア活動の養成を位置づけた。その活動をとおして、市民は多様な「生涯学習」の活動に挑戦し、また、ミュージアムの運営に参画し大学側と「協働」することで「大学開放」の内実を豊かにするという成果を上げてきたのである。

この小論では、筆者が2009年9月までコーディネートしていた「岩手大学ミュージアム」におけるボランティアの「学び」に着目し、この間の実践の中から見いだし得た「博物館教育活動の可能性」についてまとめることとする。

II 地方国立大学における「大学開放」事業と大学博物館

1. 地方国立大学における社会貢献事業の推進

今日、地方国立大学では多様な「大学開放」の事業を展開するとともに、図書館や博物館といった学内施設を「開放」することも積極的に行っている。

岩手大学では、地域(社会)貢献活動を積極的に展開してきた。地域社会の文化の向上と国際社会の発展のため、研究活動や教育活動の成果を社会還元することを基本として、次のような「社会貢献目標」を掲げ取り組みを行った。

- ①地域社会における高等教育の教授のための機会の拡大と生涯学習に資する場や学術情報の提供
- ②地域社会のニーズに応える地域振興への参画
- ③地域社会と国際社会の文化的交流のための取り組み

こうした取り組みを貫くものとして、法人化と同時に「いわて“大地”と“ひと”と共に」ということを校是とした。

岩手大学の「大学開放」を推進する上で中核的な組織として位置づけられているのが、「地域連携推進センター」の「生涯学習・知的資産部門」である¹。具体的な業務内容として、公開講座の企画・実施、公開授業講座の実施、講師紹介、地域連携講座の企画・実施、地域生涯学習計画の策定、NPO・ボランティアの支援、シニアカレッジの企画・実施、生涯学習相談、生涯学習・事業プログラム、が挙げられる。「ミュージアムボランティア」との関わりは、この「NPO・ボランティアの支援」に位置づけられている。

ところで、「ユニバーシティミュージアム」には東京大学や北海道大学のように「研究」に重点をおいたところもあるが、岩手大学では、「地方の国立大学」ということから、「ユニバーシティミュージアム」の構想は、まさにこうした地域貢献の目標を具体化するものとして打ち出された。「岩手大学ミュージアム設置準備委員会」が掲げた「理念」には、「大学は得られた研究教育活動の成果を人類共通の知的資産として広く社会に公開する」、「岩手大学の教育研究活動の公開の場として位置づける」と明記されている。また、「教育研究活動の成果を整理・収蔵」し、それらを「易しく表現し、広く公開する」ことが目標として掲げられている。さらに、地域社会との関わりを緊密にする立場を鮮明にする意味で、「地域社会と岩手大学ミュージアムを介在した交流を行う」という目標を掲げ、大学ミュージアムを地域社会との連携の場として重視することが示されていた。

このようにして開設された岩手大学ミュージアムは、「博物館法」の規定では登録博物館ないし相当施設としての要件を充足しておらず、「類似施設」である。また、「社会教育法」にいう社会教育施設でもないのではあるが、大学の教育研究活動の成果を積極的に地域社会に公開し、大学と地域社会との交流を実現する場として位置づけられているのである。

また、「ミュージアム本館」とともに学内の様々な施設・作品を結ぶ、「エコミュージアム」として構想されたのである²。施設としては、戦前に建設され重要文化財として登録されている旧農林高等学校時代の講堂や、農学部附属植物園、教育学部自然観察園、獣医学科標本室、さらに作品としては教育学部の卒業生が制作した彫刻などの野外芸術作品群等がある。

ここで、公立博物館と大学博物館とを比較して、次の点を確認しておきたい³。

地方自治体が開設した博物館の場合、その実態として、あるいは所管上教育委員会に所属していないという理由で、いわゆる博物館法の規定では「類似施設」として取り扱われる例が多い。それは、「日本博物館協会」に加盟し、自らは「博物館」としての社会的役割を果たす存在であることを意識しながらも、「登録博物館」あるいは「相当施設」としては認められない博物館が多数存在している、という実態を示すものである。

これに対して、近年増加傾向にある大学ミュージアムの場合は、必ずしも「博物館法」や「社会教育法」に規定された「博物館」の姿を追求するのではなく、大学として果たすべき社会的役割として「研究・教育・社会（地域）貢献」を掲げ、研究の成果を積極的に地域住民などに「公開する」というスタンスで開設されている場合が多い。換言すれば、あくまで「大学」としての社会的役割を追求することが主要な目的であって、「博物館法」や「社会教育法」は必ずしも重視されているのではない、ということである。

とはいえ、研究の過程で蓄積された様々な資料や、蓄積された研究成果を積極的に公開しよう、という意味では基本的には公立博物館と同じような機能を発揮することになる。また、「大学ミュージアム」でも、「展示」の構成や制作において、これまで公立博物館建設などで多くの実績を上げてきた展示業者に委託するのが通例であり、「博物館の展示」のいわば

スタンダードが集約された形で「展示」が構成されていく。

また、「博物館」の基本的な機能としても、「展示」だけでなく、多様な教育的な活動を展開することが通例となっている。博物館における専門職員である学芸員の養成カリキュラムが改訂され、平成23年度からは習得すべき授業科目・単位数が増加することになっているが、「博物館教育論」という授業科目が新たに設定されていることも、こうした傾向を反映させたものである、ということができる。

しかし、施設や機能の面では公立の博物館と大学博物館との区別は必ずしも明確ではない場合があるが、専門職員の位置づけ・配置においては基本的に異なっている、と考える。

ところで、博物館の果たすべき役割に関連して、かつて倉田公裕が博物館法第2条の定義をふまえ、「博物館の存在理由とは一体何であろうか。端的に言えば博物館は博物館活動を行い、社会の教育を役割とする機関といえよう」と述べたことに注目したい⁴。「博物館活動」の内実としては、調査研究や資料の収集・保存・管理、展示などが総体として含まれている。こうしたコンセプトを重視するならば、設置主体が地方自治体か大学か、ということは必ずしも重要ではない、ということである。

また、倉田は、「機関」という用語に関連して、「施設は建物、場所の意味で、自ら人に働きかけることはできないものであり、これに対し機関は自ら目的、主体をもってその活動を遂行する集団を意味する」⁵、と述べている。博物館以外の図書館・公民館といった社会教育施設の機能を視野に入れた場合、必ずしも倉田のとらえ方に同調することはできないが、「積極的に社会教育活動を展開するべきである」という文脈の中に位置づけるならば、重要な問題提起である、と考える。

2. 岩手大学ミュージアムの設立

先ずここでは、「岩手大学ミュージアム」の設立経緯について概観しておきたい。

大学内部では、2000年（平成12）11月に「博物館設立準備会」が組織され、翌2001年（平成13）7月に大学の評議会で正式決定された。そして、2003年（平成15）3月に、文部科学省の補助事業「地域関係貢献特別支援事業」で予算処置がなされることになり、同年10月にミュージアム本館が開館する運びとなった。オープンに関連した事業として、同年10月に「記念式典」と、地元の歴史小説家・高橋克彦氏を招いて「記念対談」（高橋氏の希望により、あえて記念講演という形式にはしなかった）が開かれた。

岩手大学ミュージアムの設立に当たって、以下の条件の下で開設が図られた。

建物は、既存のもののリユースを行うということで、それまで「放送大学岩手学習センター」として使用されていたものを活用することになった。

職員としては、専任の教員は配置せず、学芸員の配置も行わず、館長は兼務の教員とし、受付業務は3名の派遣職員で対応する、ということであった。職員配置の面だけで言うならば、いわゆる「学芸員」に相当する専門職員は配置されていないので、「ミュージアム」の実体を整えたものということではできない。

運営にあたっては、大学の全学的施設ということで、全学的に委員が選出され、「運営委員会（後に部門委員）」が組織され、定期的に会議が開催され、運営上の諸問題が討議され決定されている。

大学ミュージアムの構想は、「大学は市民の学びの場であり、市民のものである」というボ

リシーに支えられており、また、「地域とのネットワークを積極的に構築する」という考えを具体化したものである。

開館以降、ボランティア育成をはかる事業のために学内予算処置がなされてきた。経常費の支出は、光熱水費と派遣職員の雇用に限定されていたため、学内の「競争的環境」の下で「競争的資金」獲得をめざし、ミュージアムの整備やボランティア活動の育成を図る意義を訴えて「教育施設研究支援経費（戦略的経費）」を獲得し、ミュージアムの整備（展示替え、展示パネルの制作など）や、ミュージアムの活動経費を確保してきた。また、ボランティア活動としての実績を示すことで、「学長裁量経費」を獲得し、ボランティアの活動費を確保することができた。

2003年10月に開館して以来、この間入館者数は、大幅に増加してきた。初年度は10月以降だけの6ヶ月間の入館者数ではあるが、1,407人であった。翌年は、年間のトータルが2,950人となったが、10月以降だけの入館者動向をみると、ほぼ前年度と同様の入館者数にとどまっている。しかし、3年目の2005年度には4,274人と4千人台に増加し、さらに2008年度には6,148人と、6千人台に増加してきているのである。

このような入館者数の増加は、のちに述べる「ミュージアムボランティア」の活躍にささえられている面が極めて大きい、と考える。

Ⅲ 博物館の教育機能と住民の学習活動

1. 博物館の教育機能とその重視

岩手大学ミュージアムでは、「教育研究成果の公開」ということで、研究活動の中で蓄積された多様な実物資料（各種標本類、実験装置、発掘収集資料など）を展示という形態で公開するだけでなく、むしろ積極的に教育機能を発揮する、教育活動を展開することに重点が置かれることになった。即ち、地域住民のボランティアを積極的に養成し、日常の博物館教育活動に参加・参画してもらうことが目標として設定されたのである。

そのため、岩手県教育委員会と連携し、県教育委員会主催の「シルバーカレッジ」の修了生が学習成果を生かして「社会参加」する際の受け皿となるよう要請もあり、ボランティア募集を行った。併せて一般市民、学生の中からもボランティアに応募し養成講座を受講して修了後に登録するというシステムで実施した。

ボランティア活動が軌道にのる中で、先に触れたように大学側も積極的に予算処置を行うようになり、毎年1～3月に「ボランティア養成講座」が開催されることとなり、その講座修了者の中で希望する人がボランティア登録することになった。養成講座では、「博物館とは何か」ということとともに、ユニバーシティミュージアムであるため「大学ミュージアム」の果たすべき役割、「大学博物館は大学の教育研究活動の成果を公開する場である」ということや、教員の研究内容、「大学の歴史」に関する理解、さらに「大学の教育研究成果をPRする場である」ということについての理解が必要とされた。

この間にボランティア登録した人数は、平成16年度39名、平成17年度48名、平成18年度63名と漸増したことで、平成19年度は新規募集を見送ったのだが、それでも平成19年度は49名

の登録があった。平成20年度には55名の登録がなされ、ボランティアのシステムを変更するため平成21・22年度も新規募集は行わなかったが、平成21年度には33名、平成22年度には34名の登録がなされている。

ボランティア登録者には、大学としての委嘱状を交付し、学長自らボランティア一人ひとりに委嘱状を手渡している。

ボランティアの活動は、当初は「ミュージアム展示解説」を基本として「養成講座」で展示に関する知識の習得を図っていたのだが、ボランティア側から「もっと多くのことを学びたい」という積極的な要望が出され、大学教員が講師となって展示資料についての研修を行うようになった。また、「学生と交流したい」という要望がよせられたことから、正規の講義としてミュージアムを利用するよう全学的にはたらきかけ、「岩手大学ミュージアム学」という講義を新たに開設し、受講する学生に対してボランティアが展示解説を行うようになった。共通教育、基礎ゼミの一環としてミュージアムの見学を位置づける場合もあり、受講する学生に対して展示解説を行っている。

このほか、ボランティアから「留学生と交流したい」という要望がだされたことから、留学生を対象としたイベントにボランティアが参加できるように配慮されることになった。

ここで、博物館における展示解説の教育的機能と展示解説をボランティアが担う意義について検討しておきたい。

展示物を観ただけでは必ずしも十分、あるいは正確にその資料が持つ情報・価値を引き出すことができないということが多いのではあるが、展示解説は来館者の様々な疑問・質問に答えることが可能になる、という特徴・教育的意義がある。

展示解説を行う専門の職員を配置している場合もあるが、ここではボランティアが行う場合限定して述べていきたい。なお、ボランティアで十分対応できるので職員の配置は削減できる、ということでは決してない。

まず、ボランティアが展示解説することを、博物館の教育機能という面から確認したい。

ボランティアは、多くの場合、世代や職業・出身地などにおいて多様である。その個人の価値観や生活経験・生活文化なども多様なものとなる。そのことが、多様な来館者の学習ニーズに応える上で、積極的な要因として作用する可能性が高い。例えば、戦争を経験した世代だからこそ伝えられる「経験」があるとか、昭和を生きてきた世代だからこそ「昭和」について説得力をもって語ることができる、といった具合である。勿論、「経験主義」に陥る危険性もあるのだが。今少し一般化すれば、「来館者の目線」で展示解説することができる、ということである。

展示解説を専門職員が担っている場合は、来館者の問題意識や興味関心の所在、蓄積された経験・知識等々をふまえて、来館者個々に臨機応変に解説の内容・レベルを選択することが求められる。そうしてこそ、真に来館者の学習ニーズに応えることができる、ということである。

次に、ボランティアが展示解説を行う意義について、ボランティア活動に参加する人の立場から、次の4点について触れておきたい。

第一に、展示解説を行う事前の準備として研修を実施するのだが、それはボランティアにとって「学習」であり、展示資料に関する様々な知識を習得し、世界観の再構築をも可能とする。

第二に、展示資料に関する研修で学んだことを来館者に解説するという実践をとおして、習得した知識がより深い・正確なものへと精練される一方、十分説明できない点や質問されてもこたえられない事項に直面することで、学習意欲が刺激される、高められるということがあり得る。「もっと学びたい」という学習要求が形成される可能性が高い。

第三に、展示解説を担うということから、「社会参加している」という実感を感じることができる。とりわけ展示解説を受けた来館者から感謝の意を表明されたとき、強くアイデンティティの確立を意識することができる。それはまた、ひき続き学習したい、来館者に解説をしたい、というプラスの作用を促進する可能性が高い。

第四に、ボランティアは、多くの場合、世代や職業・出身地などにおいて多様であることから、その個人の価値観や生活経験・生活文化なども多様なものとなる。そのことが、ボランティア集団の中で交流を促す要因として機能した場合、「集団的教育」が実現し各人の「成長発達」を可能とする、ということである⁶。「岩手大学ミュージアム」の場合には、「学生」との交流を求める形で、いわば世代間交流が促進されたこともそうした「集団的教育」の一環として捉えることができよう。

2. ボランティア活動の発展

ボランティア活動が市民の参加で積極的に展開されるようになるにつれて、当初「ミュージアム本館での展示解説」であった活動内容は、次第に豊かなものになっていった。

大学キャンパス内には多様な植物が生息し、ホタルやリスなどの動物も棲息していることから、ボランティアから「キャンパス内の自然について研修を実施して欲しい」という要望がだされ、これを受けて大学教員による研修が行われるようになった。そしてその成果は、構内の桜や樹木に着目して、「桜ツアー」や「紅葉めぐり」、「樹木めぐり」という新たなイベントの企画へと結実していく。「桜ツアー」は、桜の開花時期に、構内で咲く様々な種類の桜の花をめぐる、というものである。「紅葉ツアー」は、紅葉の時期に、構内の様々な樹木の紅葉を鑑賞しよう、というものである。さらに、これらの「ツアー」では旧高等農林時代の建築物や資料等の他、石川啄木や宮澤賢治ゆかりの建物なども視野に入れられており、桜を鑑賞するとともに大学の構内に残る啄木や賢治ゆかりのものを知ってもらうものとして企画・実施されている。

また、宮澤賢治にゆかりの施設等も保存されていることから宮澤賢治についても研修を受けたいという要望が出され、その「学び」を生かして宮澤賢治ゆかりの場所をめぐる「賢治ツアー」というツアーが行われるようになった。こうした事業がボランティアの発案で企画・実施されるようになり、多くの市民の参加を得るようになった。ちなみに、平成16年度に初めて実施された「賢治ツアー」は、10月16日（土）に午前11時と12時から2回実施され、予想を大幅に上回る延べ250人の参加をえることができた。

こうしたボランティア活動は社会的にも注目され、地元新聞ではイベントの開催時や養成講座の実施時期をはじめ、多様な活動の場面で取り上げられ、報道されてきた。そのことは、地域での大学開放に関する情報提供として重要な意味を持つとともに、ボランティア活動に参加している人々にとってはアイデンティティを確認する契機ともなっている、ということができる。

ところで、「ミュージアムボランティア」に登録し、活動している人には中高年の人が多

い。世代が上の人の場合、若い時には大学進学率も低く家庭の経済事情などから、「大学に行きたかったけれども行けなかった」という人は決して少なくない。また、地域では「国立大学(岩手大学)は敷居が高い」と感じている人も多い。そうした状況の下で、ボランティア活動の養成講座に参加し、さらに登録し、そして展示解説という実践に参加することは、今日では一般化したボランティア・NPO活動ではあるが、「高いハードル」を越えることが求められている、ということができよう。

活動を続ける中で「研修を受けたい」、「もっと専門的に学びたい」という要求も高まり、そうしたボランティアの要望を受け止め、学外でフィールド調査を行い、展示・収蔵されている資料に関する理解を深める研修機会も設けられるようになった。

ミュージアムでボランティア活動を始めた人の中には、それを契機として新たに地域での様々なボランティア活動に参加するようになった人もいる。「病院ボランティア」、「福祉ボランティア」、「観光ボランティア」などに参加するようになったり、町内会・子供会といった地域組織での活動に積極的に参加するということに、「社会参加」の幅を拡大している人も多い。

「岩手大学ミュージアム」としての活動内容は、「ボランティア メッセ in 札幌」というイベントでも紹介された。「ブース」ごとにそれぞれのボランティア団体・組織が活動内容をパネル展示し、また、来場者に説明する、というイベントである。こうした場でも、積極的に自らの活動内容をPRする活動にとりくんできている。

Ⅳ 住民の学習と「大学開放」との協働

1. 生涯学習と「大学開放」

住民が「大学ミュージアム」を「場」として生涯学習活動を展開することに関連して、ここでは日常的な学習活動と博物館を含めた社会教育施設を利用した学習活動について、簡単に触れておきたい。

「学習」という場合、「用語」としては多義的なものであるが、この小論との関連で、「日常的に抱いている興味関心事について目的意識的に情報を入手しようという行為」としておきたい⁷。しかし、心理学などで言う「価値観や行動規範の変容」に到達しないレベルでの「学習」という行為があり得る、むしろ日常生活の中で量的にはその比重が高い、と考える。「興味関心」の内容は、一面で個人の志向によって多様であり、個人の自由な判断で選択される、ということになる。それぞれの個人は、労働・生産・生活との関連で、様々な領域に関して興味関心をいだきながら、そして学習という行為を持続的に行いながら生活を営んでいる。

同時に、他面では、「興味関心」はその個人が社会的に占めているポジションやそれまで営んできた生活・生きてきた社会状況などによって、換言すれば個人の自由意志・志向と相対的に区別される「社会的条件」によって、規定されてくる。

ところで、社会教育に関しては社会教育法や図書館法、そして博物館法が制定され、日本の「社会教育」の基本枠を構成してきた。しかし、「縦割り行政」の問題を内在させてはいるものの、労働や生産に関する「学習」が厚生労働行政や農林水産行政、経済産業行政、等々

で「教育」的な事業を展開してきた、という事実は否定できない。その意味では、「生涯学習社会」と言われる今日、「教育行政」以外の行政部門でも住民の「学習要求」に応える多様な「場」の提供がある、ということに注目しておきたい。

一方、住民の多様な自主的な学習活動が積極的に展開されるようになってきている。多様な領域での自主的な住民運動と結びつくもの、ボランティア・NPO活動と結びつくものなど、様々な領域での担い手が形成されてきている。

また、民間教育産業や大学の果たす役割が確実にその比重を高めてきている。

さらに、今日の特徴として、マスコミやインターネットの占める比重が大きくなっている、ということができよう。

このような状況をふまえて、住民の「学習」ということが捉えられなければならないのであり、そうした中で博物館に期待されていること、博物館が果たし得る役割を積極的に位置づける、ということが求められているのである。

そうした文脈で、地域住民と博物館との「協働」として「ボランティア」が組織化されている場合が多いが、岩手大学ミュージアムの実践をふまえるならば、さらに大学と住民との「社会的協同」が必要とされており、それは可能である、ということを指摘したい⁸。

関連して、地域生涯学習ネットワーク形成ということに触れておきたい。住民にとって、地域社会では多様な学習機会の提供がなされている。公民館や図書館、博物館といった社会教育施設をはじめ、民間教育産業、社会教育関係団体としての活動の中での学習等々である。さらに、日常生活では、様々なメディアをとおして学習情報が提供されている。

こうした現代社会では、地域生涯学習ネットワークの組織化が求められている。博物館も、その重要なものの一つである⁹。

個々の住民の「学習」に対して、そのようなネットワークを視野に入れた学習機会の提供や学習の育み等々が求められる。学芸員は、「社会教育施設としての博物館の専門職員」なのであるから。

2. 大学ミュージアムを利用した生涯学習活動の発展

「大学ミュージアム」でのボランティア活動は、「養成講座」や「研修」などを含めて優れて「大学開放を利用した生涯学習の活動である」と言うことができる。さらにボランティア活動に参加している人の中から、岩手大学が実施している公開講座を受講したいという人や、大学が実施している「正規授業公開（公開授業講座）」を利用して学びたい、岩手大学キャンパス内にある「放送大学」・「放送大学大学院」で学びたい、その卒業・修了の資格を得たい、とチャレンジしている人も多い。

このようなボランティア活動の参加者を中心として、これまで述べてきたボランティアの「大学開放を利用した生涯学習活動」の特徴について、次の3点に絞って整理しておきたい。

第一に、地域住民の多様な学習要求に対して、大学が積極的に「学習機会」と「実践の場」を提供している、ということである。

展示解説を行うためには、展示資料に即してその資料的価値についての学習が求められる。大学で蓄積された研究方法・研究成果等について、大学教員から直接学ぶ機会を得ることで、ボランティアの学習意欲も向上し、また、高い水準の学習到達度を示している。学習はまた、展示解説や「桜ツアー」や「賢治ツアー」といった実践と結びつけられることでより

正確な成果を上げ、また学習意欲を向上させ持続的・継続的な学習へと導いている。

ボランティア集団の中では、市民と学生との交流ということも含めて世代間交流もすみ、世代間で異なる人生経験・文化・価値観などの交流がアイデンティティ形成において重要な意味を持っているのである。

こうした経験交流は、多様なボランティア活動などの「社会参加」へと発展する契機となり、また「大学開放」を含めた多様な持続的・継続的な学習機会への参加などに結びついているのである。

第二に、住民の参加・参画を重視している、ということである。

ボランティア参加者がこれまでの人生経験（職業人として、あるいは主婦として、介護経験者として、等々）の中で蓄積してきたものは、極めて多領域にわたるものであり、かけがえないものである。そこには「学習成果」も豊富に蓄積されている。

さらに、ボランティア活動に参加している多くの人が「岩手」や「岩手大学」に愛着を感じており、地域の自然・歴史・文化、とりわけ石川啄木や宮澤賢治といった「地域の先人」などに興味関心を持っている。そのことは「ミュージアムボランティア」として活動して行く上での重要な動機ともなっているのである。

このようなボランティアの学習要求や実践の要求は、大学側の意図を超えて多様な創意工夫に満ちた事業展開の可能性を内在させたものとなっている。実際に、ボランティアの養成講座のカリキュラムを開発する上で、あるいは「桜ツアー」や「賢治ツアー」といったイベントを企画・実施するうえで、ボランティアが参加・参画することは重要な意義をもつということを証明している。

第三に、大学側としても「生涯学習プログラム」の開発において多くの成果を蓄積することができた、ということである。

「公開講座」や「正規授業公開」など今日では「大学開放」の多様な事業が行われており、それらは「教育研究成果の公開」という性格を持っているのであるが、「ボランティア」参加者の学習・実践をとおして、さらにボランティアの大学運営への参加・参画をとおして、真に「大学開放」を行い、大学と住民との間で双方向の情報交換・意思疎通が進展し、「生涯学習プログラム」を実践的に開発していく上で、貴重な成果・教訓などを蓄積することができた、ということである。

このような意義を持つ「ミュージアムボランティア」の活動は、大学の「地域貢献」の活動として外部の高い評価を受けている。即ち、独立行政法人大学評価・学位授与機構が平成18年度に実施した「選択的評価事項に係わる評価」という項目の認証評価では、「正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況」の事項の中で、大学キャンパス開放及びミュージアムボランティア養成講座事業等に高い評価を得ることができた。この認証評価で多岐にわたる範囲での評価項目があったが、メディアの多くが大学ミュージアムボランティア事業を報道対象としたため、地域と大学との連携として実施された市民参画事業が注目されることになった。また、学内で日常的に活動を積み重ねているボランティアの活動が大学運営の中でも評価されるということに気づき始めるきっかけとなった。

V 結び

岩手大学は、地方国立大学が施設設備・予算・人員配置も不足がちな中で「大学開放」の一環として「大学ミュージアム」を開設し、「教育活動」に重点をおき「展示解説」を市民のボランティアに委嘱することで、多大な成果を上げてきた。養成講座を修了し「ミュージアムボランティア」として登録した市民は、積極的に展示資料や収蔵資料、大学構内に生息する動植物、さらに宮沢賢治や石川啄木ゆかりの施設等について学ぶ機会を求めてきた。そうした要望に応じて実施された「研修」や「学び」の成果は、大学との「協働」により、「賢治ツアー」など創意工夫あふれるイベントの企画・実施へと結実してきた。

また、「ミュージアムボランティア」の中からは、大学を「場」として「公開講座」や「公開事業」で学び続けたり、「放送大学」や「放送大学院」で学ぶ人も多くうまれてきている。さらに、「ミュージアムボランティア」を契機として、あらたに地域で「福祉ボランティア」や「病院ボランティア」などのボランティア活動などに参加し始めたり、町内会活動その他で「社会参加」を行うようになった人も多い。

この小論では、①「大学博物館」を拠点として市民がボランティア活動を展開するなかで、自主的に生涯学習活動を展開・発展させている、②その契機となっているのは積極的に自ら研修の必要性を認識し、大学側に研修の機会を求め、あるいは創造的な事業を展開するようになるまで「成長」している、という実態を示すことができた。そうした住民の学習・実践は、「大学博物館」を拠点とし、市民の学習要求や「社会参加」の希望を受け止めて「市民と大学との協働」が追求されたことで可能になった、と考える。

注

- 1 岩手大学におけるこれまでの「大学開放」事業については、拙稿「地域生涯学習の展開と大学開放」(『大阪教育大学教育実践研究第3号』, 2009年)などを参照。
- 2 「エコミュージアム」については、基本的には「生活・環境」に基礎づけられたものとして捉えている。岩手大学の場合、「本館」の他いくつかの施設・植物園などをネットワーク化する(まるとミュージアム)構想の下、ミュージアムが設立されており、「エコミュージアム」としての性格をもつものとする。なお、「エコミュージアム」については、新井重三『実践エコミュージアム入門—21世紀のまちおこし—』(牧野出版, 1995年)に学ぶところが多い。
- 3 「博物館」についての基本的なとらえ方については、すでに別のところでまとめているので、それを参照されたい。藤田昇治・藤田公仁子「博物館の現代的課題」(神田嘉延・遠藤知恵子・宮崎隆志編著『生涯学習を組織するもの』, 北樹出版, 1997年)。
- 4 倉田公裕『博物館学』, p.10, 東京堂出版, 1990年, 第12刷。
- 5 同前, p.19。
- 6 「社会教育と集団」との関連は、戦前戦後の社会教育をめぐる主要な論点の一つとなってきた。この点については、例えば千野陽一「社会教育の集団」(千野陽一『現代社会教育論』, 第6章, 新評論, 1976年)などがある。
- 7 心理学などの研究領域でも「学習」について言及されているが、「価値観や行動規範の変容」として捉える見解もある。例えば、関口礼子は、学習は「一口で言えば、『行動の変容』である」としている(関口礼子

「今なぜ生涯学習がクローズアップされるのか」(関口礼子・小池源吾・西岡正子・鈴木志元・堀薫夫著『新しい時代の生涯学習』, 有斐閣, 2002年)。

- 8 「社会的協同」については, 鈴木敏正『教育の公共化と社会的協同』(北樹出版, 2006年)などを参照されたい。
- 9 「地域生涯学習ネットワーク」については, 拙稿「ネットワーク型地域生涯学習と大学開放」(『岩手大学生涯学習論集』, 第4号, 2008年)を参照。